慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	巴金の朝鮮戦争戦地訪問とその作品について
Sub Title	Ba Jin in the Korean War and his works
Author	道上, 知弘(Michiue, Tomohiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2003
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.85, (2003. 12) ,p.80- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00850001-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巴金の朝鮮戦争戦地訪問とその作品について

道上　知弘

一、はじめに

巴金（一九〇四～）の作品では、代表作である『家』（一九三三）や抗戦末期に書かれた『憩園』（一九四四）や『寒夜』（一九四七）、文革後に連載された『随想録』などが日本でも有名であるが、その間を埋める時期、つまり、一九四九年の中華人民共和国の成立より、一九六六年の文化大革命の勃発までの十七年間、いわゆる「十七年期」に書かれた作品に言及されることは、これまであまりなかった。とりわけ巴金が朝鮮戦争の戦地を訪問した経験をもと残した多量の文章の研究については巴金研究のなかでも立ち遅れている分野であり、その時期に焦点を当てた、まとまった研究はいまだなされていない。[1] しかし、朝鮮戦争とその戦地訪問は、社会主義中国とともに歩むことを決意した巴金にとって最初の大事件であり、その後の巴金を考える上でも重要なテーマである。本稿では、そのような問題意識から、巴金「十七年期」研究のなかでの位置づけを試みつつ、基礎作業として朝鮮戦争の戦地訪問に材を取った作品群を整理して

ゆきたい。

二、巴金「十七年期」研究の視点

この「十七年期」をひとつの時代区分として扱うのは、現代文学史に関する諸記述に散見することだが[2]、その文学史における位置づけは、他の時代研究に比べて、はるかに不十分なものであるといえよう。巴金についてもまた例外ではなく、膨大な先行研究の中で、専らその時代を扱った論文は、他の時代研究と比べるとやはりはるかに少ない[3]。

この時期、中国全国文学芸術聯合会（以下、文聯）副主席、中国作家協会（以下、作協）副主席、上海市文聯主席、作協上海分会主席などを歴任、また『文藝月報』、『収穫』、『上海文学』などの編集長も務めるなど社会的地位も向上し、生活も安定していた巴金は、共産党がもたらしてくれるであろう新しい社会に対して大きな期待を抱き、自分もそれに貢献するように尽力していた。この時期の巴金に関する年表や伝記を追ってゆくと、主な活動は「新中国」の代表の一人として世界各地を訪問することにあり、その著作活動もそれに伴って紀行文やルポルタージュに集中していることがわかる。

具体的にこの十七年間における巴金の国外活動を簡略に整理すると次のようになる。

一九五〇年十一月　第二回世界平和擁護大会に中国代表団の一員として出席（ワルシャワ・ポーランド各地・モスクワ）
一九五二年三月　朝鮮戦地訪問団団長として朝鮮の各前線を訪問（朝鮮各地）
一九五三年八月　朝鮮戦地再訪（朝鮮各地）

一九五四年七月　チェーホフ逝去五十周年紀念活動に出席（モスクワ・ソ連各地）
一九五五年四月　アジア・アフリカ会議（以下A・A会議）に出席（バンドン）
一九五六年一月　ドイツ民主共和国第四回作家大会に出席（ベルリン）
十二月　アジア作家会議に出席（ニューデリー）
一九五七年十一月　十月革命四十周年記念式典に中国労働人民代表団団員として出席（モスクワ）
一九五八年十月　A・A会議に出席（タシケント）
一九六一年三月　A・A会議東京緊急集会に中国作家代表団団長として出席（東京）
一九六二年八月　第八回原水爆禁止世界大会に中国代表団団長として参加（東京）
一九六三年六月　北ヴェトナムを中国作家代表団団長として訪問（ヴェトナム各地）
一九六五年七月　北ヴェトナム再訪（ヴェトナム各地）[4]

「新中国」成立後、巴金はほぼ毎年のように代表団に参加して、「第三世界」を中心とした外国に赴いているが、国内においても各国からの訪中団などの接見に数多く出席するなど、精力的に外交活動に参画している。その背景には、すでに多くの国々で『家』などの作品の翻訳が出版され、対外的にも有名であった巴金を「新中国」の「顔」として利用しようとした政府の思惑があるが、「自己改造」の必要に迫られていた巴金自身も、これらの外交活動を通じて真摯に新国家建設への貢献を望んでいた。

「十七年期」における巴金の著作活動は、旧作の整理やその解題の執筆、外国文学の翻訳や改訳[5]なども含まれるが、

李存光氏はこの時代の作品を、「朝鮮戦争に関するもの」、「新中国、新時代を賛美したもの」、「外国訪問に関するもの」の三つに分けている。[6] 朝鮮戦争の戦地訪問も国外での体験であることを考えると、三つ目の項目は「十七年期」の巴金の著作活動の大半を占めており、この時代の巴金を考える上で重要な点であることが分かる。中でも二回訪問した朝鮮に関する著作活動は文革直前まで続いており、帝国主義と戦う志願軍兵士や朝鮮人たちの「英雄的面貌」を描くことに巴金がかなりの力を注いでいたことは、李氏が独立させて一項を設けていることからも明らかであろう。

三、朝鮮戦争と中国

一九五〇年六月二十五日、中国と同時に解放を迎えたものの、ソ連とアメリカの分割統治によって、朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国（以下、日本での慣例に従ってそれぞれ北朝鮮、韓国と略す）の二つの政権が成立していた朝鮮半島で内戦が勃発した。開戦時は北朝鮮の朝鮮人民軍が圧倒的に優勢だったが、米軍の総司令官ダグラス・マッカーサーによる、連合国軍大部隊の仁川への上陸作戦が同年九月十五日に行われて以降、戦局は一変し、前線はたちまち中朝国境の鴨緑江にまで達した。米軍が三十八度線を越えてより、数度にわたり米国に警告を発してきた周恩来は、九月三十日に再び「中国人民は決して外国の侵略を容認することはしない。帝国主義者の隣国に対するほしいままの侵略を放置するわけにはいかない」[7]と宣告した。続けて中国共産党中央は十月八日、「抗美援朝、保家衛国」（アメリカ帝国主義に対抗して朝鮮を援け、国家を防衛する）の方針を打ち出し、ついに国家主席毛沢東は中国人民志願軍の朝鮮戦争参戦命令を発し、十月十九日、志願軍は中朝の国境を流れる鴨緑江を渡った。

当時、中国は建国してようやく一年が経ったばかりで、国内には土地改革などの内政問題が山積していただけではな

く、台湾海峡の緊張や国民党の残存勢力の脅威で、とても外地に兵力を注入する余裕は無かった。それをあえて断行した理由については他の先行研究に譲るが、ようやく「解放」を迎えた国民たちを、再び先行きの見えぬ不安に陥れるには十分であった。そこで全国的に展開されたのが、先に挙げたスローガンの国民への徹底化を図る「抗美援朝運動」という政治運動であった。これは、ほぼ同時期に発動された「反革命鎮圧運動」、「土地改革」などと合わせて三大運動と呼ばれており、社会主義における「愛国主義」の強化と「国際主義」の促進とを目的としているものである。そしてその裏には「抗美援朝、保家衛国」のスローガンで反米教育を徹底し、外敵を設定することによって国民の不満を国内問題からそらそうとする目的もあった。

文藝界も即座に呼応し、同年十月、文聯は「抗美援朝」の宣伝活動を展開することを決定し、十一月十六日、北京において、茅盾、丁玲、田間、鄭振鐸、葉聖陶など著名な作家たちが連名で「我々はペンだけでなく銃をも手に取り、英雄的な戦士たちとともに、親愛なる朝鮮の兄弟たちとともに、凶悪なアメリカ帝国主義に打ち勝つために、あくまで戦う」[8]と宣言した。「抗美援朝」をめぐる文学政策の目的は「国民の戦意の昂揚」と「中国参戦の正当化」、そして「打倒アメリカ帝国主義」の宣揚し、識字層を通じて国内世論を統一することにあった。「抗美援朝運動」は、「新中国」が初めて国を挙げて行った一大キャンペーンであったといえよう。

そして、巴金をはじめ、老舎、田漢、劉白羽、田間、楊朔、魏巍、路翎などの作家や多くの従軍記者が前線に赴き、報告文学（ルポルタージュ）や、詩や小説の創作作品を生み出した。三年間に書かれた報告文学は膨大なものとなり、その成果の一部は、全三巻にわたる『朝鮮通訊報告選』に収められ、収録数は百九篇にも及ぶが、これに収められなかったもの、その前後の時期に書かれたものを合わせると数え切れないほどの作品がある。これら「抗美援朝文学」と呼

ぶべき作品群については稿を改めて論じることにする。

四、朝鮮戦地訪問に至るまで

まず巴金が朝鮮の戦地に赴くまでの経緯を見てみたい。朝鮮戦争が勃発した年の一九五〇年十月、巴金はポーランドの首都ワルシャワで開催された第二回世界平和擁護大会に参加した。大会に参加した代表団は十七名で、団長は郭沫若である。巴金はこの大会で発言するための原稿を用意していたが、総勢千八百人が参加した大規模な大会であり、会議上で発言できた者はたったの百二十人に過ぎず、巴金はそれを発表する機会を得られなかった。そのため、巴金は帰国後に、この時の原稿を二つに書き改めて、『我愿意献出我的一切』と『給西方作家的公開信』と題して、一九五七年一月七日の『人民日報』と『大公報』に同事に発表した。『給西方作家的公開信』[9]で巴金は次のように述べている。

一人の作家として、私は自分の任務を、平和を広く訴え、人類の団結をさらに緊密なものにすることだと考えています。（中略）一人の中国人として、私は誰よりも平和を愛し、平和を大切に思い、平和を必要としているということができます。（中略）しかし今の平和も脅威を受けています。アメリカ帝国主義者は我々に平和を享受させず、平和建設の機会を与えまいとしているのです。彼らの国防線は我々の台湾に移り、彼らの鉄の蹄は我々の東北国境にまで踏み込んでいます。我々の都市は爆撃され、我々の人民は機銃掃射を受けています。（中略）今日、確かに一片の大きな黒い雲が人類の希望を覆っています。朝鮮の土地に落とされているメガトン爆弾は世界文明に対する重大な脅威です。朝鮮人民の苦難は全世界の人々の良心を激しく揺さぶっています。朝鮮に対する侵略戦争は

既に事実となり、そればかりか休むことなく拡大し続けているのです。[10]

平和を希求する巴金の切実な思いが伝わってくる文章だが、同事に、中国の朝鮮戦争介入を正当化するスポークスマンとしての役割を果たしてしまっているのも見落とせないポイントである。巴金はこれ以後、同じような主張をあちこちで繰り返すようになる。

一九五一年に入り、ポーランド行の成果である著作の出版や、さまざまな会議、大会に出席にするなど巴金の文学者としての活動はますます多忙になったが、巴金の平和主義はいっそう堅固なものとなっていった。彼の関心は、過去に遠いヨーロッパで行われた虐殺よりも、いままさに隣国で繰り広げられている戦争にあった。

二月に『中国人民志願軍部隊と朝鮮人民軍への二通の慰問状』[11]を書いて、中朝両国の軍隊に畏敬と感謝の意を表し、また六月には上海で開催された「アメリカの侵略に反対する中国人民保衛世界大会」で華東抗美援朝総分会委員に選出され、さらに七月には上海市抗美援朝代表大会に出席するなど、巴金の朝鮮戦争への関心はますます高まっていった。

一九五一年末に毛沢東が「思想改造」を提起してより、胡喬木や周揚などが相次いでそれに呼応する報告を大会で行い、文藝界でも作家たちに「工、農、兵」（労働者、農民、兵士）たちの生活を体験させ、思想を「改造」するために、彼らを工場、農村、軍隊に派遣し、「体験生活」をさせる方針を決定した。巴金は、抗日戦争時に交友のあった朝鮮人革命家などの存在から朝鮮に対して特別な感慨を抱いていたが、国外に行って家族と離れることにはやはり躊躇があった。しかし、中共中央宣伝部文藝部の所長で、中国文壇の指導者的立場にあった丁玲（一九〇七～一九八六）が曹禺（一九一〇～一九九六）を通じて巴金に朝鮮に行くように示唆すると、巴金は妻の蕭珊と相談した後に朝鮮に行くこと

を決定した。解放区で共産党とともに戦ってきた丁玲は、巴金のように国民党支配下の地区で暮らしてきた人間に対して大きな発言力をもっていたが、その半年前、彼女は文章の中で巴金の作品に論及し、「巴金の書く革命というものは、上に指導者がなく、下に大衆がいない。中間にただ友人のような、あるいは恋人のような人がいて、一緒に革命しようとしている。これでは革命などできるはずがない。」また、巴金の作品は確かに「革命に対して好い影響を及ぼしたが、彼の革命というものは、指導者も要らなければ大衆も必要としない、空想上のものである。彼について行っても人は永遠にさらに前に進むことは絶対できない」と酷評する一方、「最近の巴金は、自分の実際的でない思想と作風を修正しようとしている」とその方向転換を好意的に評価している。[12] このようなことも巴金の朝鮮行きの決定を後押ししたに違いないだろう。

丁玲は赴朝戦地訪問団の結成を中国文聯の名で申請し、巴金をこの訪問団の団長に任命した。総勢十八人の訪問団は、著名な作家、音楽家、美術家などで構成された。[13]

また当時の巴金を知る上で、貴重な資料として一九九四年に浙江文藝出版社から出版された『家書・巴金蕭珊書信集』がある。これには解放後に巴金とその妻蕭珊（本名、陳蘊珍）が交わした書簡が集められたものだが、これによると、巴金は北京で準備を終えて、瀋陽に移り、朝鮮に向かうまでの約一カ月の間に、十八通もの手紙を上海の自宅にいる蕭珊宛に送っている。蕭珊からの手紙を含めると二十通以上の手紙のやり取りが行われたことになる。この書簡集が出版されたことにより、朝鮮に向かう直前の巴金の生活や心境をうかがい知ることができるようになった。

巴金は手紙の中で、しきりに上海に残してきた蕭珊や二人の子供たちの健康を案じ、また自分の準備が順調なことを述べているが、二月一八日付けの手紙ではこう述べている。

（曹禺に朝鮮に行くのをやめて工場に行くことを勧められたが…著者註）私はやはり朝鮮に行くのがよいとおもう。鍛練ができるし、自己改造にも役立つからだ。丁玲たちもわたしが朝鮮に行くことに賛成してくれた。だから、そう決めたのだ。朝鮮では半年になるかも知れないし、もしかしたらほんのちょっとで部隊と一緒に帰国するかもしれない。だけども、いずれにせよ家に戻るのは半年後になるだろう。この別れを悲しまないでほしい。半年なんて、あっと言う間に経ってしまうものだから。

ようやく訪れた平和と、あたたかい家庭に恵まれた安定した暮らしから別れを告げることは巴金にとって身を切るような辛さがあった。しかし、同日、会議が終わって再び考えた巴金は、その恋々とした気持ちを断ち切るように再び手紙を書いている。

わたしはこの別れがいちばんつらい。離れ離れになる時間が最も長く、そのうえこれからの仕事をまだ全て把握できていないからだ。私には経験もないし、仕事の能力も方法もない。あるのは情熱と決意だけだ。（中略）私は一つの場所にとどまっていたいが、私はあちこち奔走しなければならない。私は上海で平穏無事に仕事をしていたいが、全てを捨てて朝鮮に行かねばならない。私は自分が相当に強い惰性を持っている人間だということを知っている。だから、私は努力して自分と戦い、もっと役に立つ人間に自分を変えたいのだ。君から離れることを責めないでくれ。上海にいる間、君と存分に遊べなかったことや話ができなかったことを責めないでくれ。君は私が今、

どんなにひどくそんな思いで苦しめられているか察してくれるだろう。君ならきっと許してくれるはずだ。私はただ仕事を立派に終えて、君に会える喜びの日を思うだけだ。

文学的な修辞を排した率直な文体であるが、この書簡から読み取れることは、巴金の訪朝に対する並々ならぬ決意であろう。当時、自他両面から常に自己改造を迫られていた巴金は、自分の文学をいかに社会主義国家建設に「役に立つ」ものにするか絶えず模索し、ついに朝鮮への戦地訪問という格好の機会に出会ったのである。国内での文学活動の中断や家族との別れなどの犠牲は大きいが、巴金はそこに大きな意義を見いだしたのである。

巴金は同年三月七日に北京での準備学習を終えて出発し、翌八日に沈陽に着いた。そして途中、遼寧省の安東（現丹東）で一泊した後、ついに鴨緑江を渡った。

五、作品について

巴金は一九五二年二月十五日～同年十月十五日と一九五三年八月十日～一九五四年一月十日の二回の朝鮮戦地訪問を行ったが、その体験をもとに書いた作品は、『生活在英雄們的中間』（一九五三）と『保衛和平的人們』（一九五四）、『英雄的故事』（一九五三）、『明珠和玉姫』（一九五七）、『李大海』（一九六一）という五つの作品集にまとめられている。前者の二つが報告文学集であり、後者三つが創作集である。この他には、小説『団円』[14]を原作とした映画『英雄兒女』（武兆堤監督、長春電影製片廠作品、一九六四）もある。また朝鮮滞在中の日記である『赴朝日記』[15]や、先に挙げた蕭珊との往復書簡集である『家書・巴金蕭珊書信集』も重要な資料である。以下、五十年代に編まれた四つの作品集のう

ち三つを選んで簡単な紹介を加える。

『生活在英雄們的中間』[16]

この作品集は第一次訪朝の際に書かれた十一篇の作品をまとめたものである。この作品集は、朝鮮戦争当時の平壌の情景や、彭徳懐、金日成といった両国の要人たちとの会見録をも含み、現在においても貴重な資料的な価値をもっている。なかでも『我們会見了彭徳懐指令員』は、一九五二年四月九日に『人民日報』に発表され、巴金の代表的な朝鮮戦争ルポとなった最初の作品である。また一九五二年六月一日に「人民文学」六月号に発表された『平壌、英雄的都市』は、朝鮮戦争下の平壌の様子をいきいきと伝えており、朝鮮民主主義人民共和国の首相で、朝鮮人民軍の最高司令官であった金日成との会見の模様や、朝鮮文学藝術総同盟の副委員長の李泰俊を始めとする朝鮮の作家たちとの交流の様子も記されている。表題作である『生活在英雄們的中間』の他にも、『在開城中立区』、『朝鮮戦地的春夜』、『一箇模範的通訊連』、『起雷英雄們的中間』、『保衛和平、保衛朝鮮的母親和孩子』、『青年戦士趙杰仁同士』などが収められており、部隊での生活中に取材した志願軍兵士や、あるいは現地の宿泊地で世話になった朝鮮人たちから聞いた話をもとに多くの兵士像を描いている。

『英雄的故事』[17]

この短編集には『寄朝鮮某地（代序）・給志願軍某部政治部李希庚同志』、『堅強的戦士』、『一箇偵察員的故事』、『黄文元同志』、『愛的故事』の五篇が収められている。これも前作と同じく、第一次訪朝の経験をもとに志願軍兵士たちの

生活と英雄的事跡を書いたものであるが、いずれも創作小説の形を取っている。「後記」において「残念なことに私の書く力が不足しているので、英雄の面貌を描き出すことができなかった。だからこの小説集は私の試作と言えるものである…（略）」とあるが、『文藝報』などでは概ね好評を博した作品であった小説『黄文元同志』[18]について、読者の一人から非難の手紙を受け取ったことに対して、一九五三年十月二十九日付の蕭珊へ宛てた手紙で次のように述べている。

『黄文元』について志願軍の中には、良い作品だという人は多いのだけれど、北京のある青年労働者が手紙をよこしてきて、これは失敗作で、普通の新聞に載せる作品にも及ばないとまで言った。彼は前半部分の大半は削除すべきだと言っているが、それは私自身もすでに気づいていたことだ。私が「文藝月報」にこれを発表したくなかったのは、まさにこういう読者がいるからにほかならない。もし『黄文元』を私が自分で「主編」する刊行物に発表すれば、口汚く罵る手紙をよこすことがわかっていたからだ。読者が多ければ、意見も多い。時には自分を大衆とみなしている読者もいて、これは作者としてはどうしようもない。[19]

普段の巴金に見られない冷静さを欠いた激しい口調であるが、このようなところからも、不慣れな題材を扱った創作活動がなかなか自分の思うように行かない焦りと苛立ちが読み取れる。戦争を知ってはいても、実際の軍隊生活を経験したことのない巴金にとって、軍隊の「生活」を書くということはかなり無理のある挑戦であった。

『保衛和平的人們』[20]

この作品集には代序、後記あわせて九篇の作品が収められている。初版は一九五四年十一月に、中国青年出版社から出版された。

七ヶ月にわたる第一次赴朝を終え、巴金は一九五二年十月十二日、帰国の途につき、総括報告をした後、巴金は家族を伴って上海に戻り、朝鮮に取材した作品の整理と出版に追われていたが、朝鮮の戦地を思う気持ちはますます強くなっていった。翌年七月二十七日、板門店で停戦協定が調印されると、再び巴金に代表団の一員として朝鮮に赴く機会が巡って来た。巴金は八月上旬に出発し、同十五日には朝鮮黄海道沙里院市で開催された朝鮮解放八周年を記念する大会に出席している。[21] そして同年十二月下旬まで朝鮮に滞在し、再び多くの作品を書いた。それらを収めているのが、作品集『保衛和平的人們』である。

この作品集では、前二作に比べて、『金剛山上発生的事情』[22]や『魏連長和他的連隊』[23]など、「英雄的」な事績を残した志願軍兵士たちの数多くのエピソードが中心に据えられている。前作では、戦功を上げた兵士から直接に話を聞いて、それを文章にしたものが多かったが、本作品は壮烈な戦死を遂げた兵士たちの話が大半を占めている。例を挙げると、『魏連長和他的連隊』では魏国鈞連隊長の部隊で戦死した数人の兵士たちの事績が紹介されているのだが、その中で最もインパクトがあるのは「爆破組三勇士」の短いエピソードである。これは作戦遂行のために、鄭子清、潘林生、徐安生の三人の兵士が、次々と身を犠牲にしながら、敵のトーチカの背後にある坑道を爆破して、敵の退路を断つことに成功したという話である。これは日本で最もよく知られた戦争美談のひとつである「爆弾三勇士」[24]に酷似していることからも、「美談」としての熱狂的なアピール性を十分に備えたものであるが、両者の比較検討はプロパガンダとしての戦争文学を考える意味でも重要であろう。

六、巴金の『窪地上的「戦役」』批判

さらに、朝鮮戦争をめぐる巴金の動きの中で興味深いもののひとつとして、一九五五年に書かれた『談別有用心的「窪地上的《戦役》」』[25]を取り上げたい。これは、巴金が二回目の訪朝を終えて帰国してから一年半後に書かれたもので、路翎（一九二三～一九九四）の小説『窪地上的「戦役」』に対する書評である。これもまた作者の朝鮮戦地訪問の経験をもとに志願軍兵士を描いた作品であったが、巴金が読後に得たのは「感動」などではなく、「失望」と「非常に不快な感覚」であった。

『窪地上的「戦役」』のストーリーは、志願軍の兵士である王應洪が戦地で出逢った朝鮮の女性金聖姫からもらった刺繍のハンカチを胸のポケットに入れ、一回目の戦闘に参加するが、王應洪はこの戦闘で命を落とし、彼の血に染まったハンカチだけが再び彼女のもとに返って来る、というものである。巴金はこの小説を、「プチブル的」な「恋愛至上主義」を描いたものだと非難し、自分が朝鮮で出逢った志願軍兵士や朝鮮女性の中に王應洪や金聖姫のような人物は一人もいなかったと述べている。続けて、作品中の王應洪の性格にはプロレタリアート階級の「崇高さ」、「寛大さ」、「素朴さ」、「誠実さ」がなく、偽りの「自己犠牲」の精神で飾られている。金聖姫もかつて平壌で会った金日成が称えたような「英雄的な女性」などではなく、まるで旧中国の「大富豪の令嬢」のようだと評している。だから、存在しようのない両者に恋愛感情など生まれるはずはなく、この小説は根も葉もない明らかな「ウソ」だと酷評し、さらに「愛」は「軍の規律」をも越えるという結論を導こうとする路翎に対して、「下劣な個人主義が集団主義に取って代わろうとし、腐った自由主義が愛国主義と国際主義に取って代わろうとし、ブルジョア的な個人主義の思想感情がプロリタリアート

階級の革命戦士の思想感情に取って代わろうとしている。その黒を白と言いくるめるような方法で反革命を宣伝しようとしている」それが『窪地上的「戦役」』だ、と語気を荒げて断定している。

さらに、何度も『窪地上的「戦役」』を評価する胡風の書評を引いて弾劾し、さらに、作者路翎を胡風反革命集団の中核メンバーだとして、この作品が「どのような人に奉仕しているのか、我々はさらにはっきりと見極めることができるのである」と結んでいる。「公式化」された政治的な主張を繰り返すことの多くなっていた巴金だが、自分の抱いている「英雄的な志願軍」像にも抵触したのか、一段と激しい筆致で批判を繰り広げている。

一九五五年といえば胡風批判が本格化し、巴金も自らが編集する雑誌『文藝月報』などに三篇の胡風批判の文章を書き、反胡風集団の論陣を張っていた。共産党の方針を無批判に受け入れ、賛美する側に身を委ねていた巴金は、すでに「正常」な判断力を失いかけていたのか、これ以後、彼の主張は完全に体制側のものとなり、かつての友人知人たちを激しく批判し始める。そのことが文革後の苦悩のひとつとなり、やがて『随想録』に結びついてゆくのだが、『談別有用心的「窪地上的「戦役」』はその蹉跌の過程を如実に示す資料であろう。

七、六十年代の作品・『三同志』の執筆

六十年代に入り、それまでの作品に強い不満を抱いていた巴金は、再び志願軍に取材した小説を書き始める。その成果は短編小説集『李大海』[26]にまとめられた。『朝鮮的夢（代序）』をはじめ、『副指導員』、『回家』、『軍長的心』、『再見』、『団円』、『飛罷、英雄的小嘎嘶』など七つの短編が収められている。いずれも作風と内容は五十年代に書かれたものとほとんど大差はないが、再び創作活動を始めたことについて、李存光氏は『巴金伝』[27]において、これは五八年より始ま

った巴金批判の矛先をかわすために、中国共産党の指導と教育のもとで戦い、成長する理想的な英雄人物」を描くという具体的な行動で、社会主義への忠誠を示そうとしたものであると分析している。しかし、没落した知識人や、ありふれた小人物を書くことに長けていた巴金も、前に述べた通り兵士としての生活や実際の戦闘を経験したことがないために、党の意向に沿った「プロレタリアートに奉仕」する「英雄的兵士」を描くことの限界を痛感しており、その焦りがまた執筆にも影響していた。

さらに、『李大海』の執筆、編集と並行して、巴金は六〇年十月からおよそ一年の時間をかけて、『寒夜』以降、唯一の中編小説である『三同志』を苦心の末に書き上げた。全二十六章で、主人公楊林と、王理明、劉加亮という三人の兵士が、朝鮮の戦場で互いに助け合いながら成長し、幾多の戦役を経ながらも、最後に楊林が壮烈な戦士を遂げて「英雄」になる、という物語である。これは、それまでの作品の要素だけでなく、巴金が朝鮮で見聞きしたことを全て詰め込もうとした集大成とも呼べる作品であるのだが、巴金はそれを発表しようとせず、六二年に一度書き改めたものの、九三年に『巴金全集』第二十巻に収められるまで、人目に触れることはなかった。

巴金は『全集』に収めるに際して、巻頭で「私は自分のよく知らない人や事を書いたので失敗した。これはひとつの痛烈な教訓であった」と述べている。また、『全集』の編集者である王仰晨に宛てた書簡[28]で、『三同志』は「失敗作であり、出版や発表の条件に欠けていた」と述べ、「廃品」であるとさえ言っている。その理由として、「『三同志』の欠点のひとつは『物語』に欠けていたことだ。私は自分の書いた部隊生活をよく知らず、土地改革を経て入隊した青年戦士たちの気持ちを理解していなかったからだ」とし、「口では『(部隊の)生活に深く入り込む』と言いつつも、始終表面的なことばかりで、深く入って行くことはできなかった」と告白している。これは、それまでの志願軍兵士を描いた作

品全てに対する反省の言であるとも取れるだろう。しかし、また「私はこの廃品に費やした時間と、二度の訪朝の生活体験を決して後悔はしていない。この（執筆に要した）一年の生活は無駄に過ごしたわけではなく、自己弁護するわけではないが、何も作品を書くことができなくても、人の世には美しい感情があることをより深く理解することができたからだ」とも述べている。戦地訪問の経験とそれに伴う執筆活動に対する巴金自身の総括として意味深い所感である。

八、おわりに

以上見てきたように、これらの作品はいくつもの興味深い問題をはらんでいると同時に、巴金の精神史の具体的な資料をも提示してくれている。また、朝鮮戦争期の巴金やその作品群を扱うには、先に述べた、現代中国史と密着した巴金の個人史における「十七年期」研究の視点の他に、中国における「抗美援朝文学」の中での考察、さらには朝鮮戦争に影響を受けた他国の文学との比較検討という作業も必要である。特に朝鮮戦争の当事国であり、中国と同陣営であった北朝鮮の「祖国解放戦争文学」や、立場は正反対ながらも、文学的な源流を同じくする台湾の「反共抗俄（ソ連）文学」などと合わせて考えることは、「巴金と朝鮮戦争」というテーマを同時代史というヨコの拡がりの中でとらえ、新たな視点を獲得するためにも重要なことであろう。[29] 本稿は資料の整理と問題提起のみにとどまる散漫なものだが、四九年以降の巴金の作品を読み直すための足場として、今後さらにひとつひとつ深めてゆき、「十七年期」の巴金を読む現在的意義を探りたいと考えている。

注

(1) 朝鮮戦地訪問に関する比較的新しい研究としては、周立民「巴金在朝鮮戦場」(『中国現代研究叢刊』二〇〇一年第二期)などがある。また、日本では拙稿『朝鮮戦争と中国の作家たち・巴金と50年代』(『情況』情況出版、一九九七年八・九月号)がある。

(2) 例えば、洪子誠主編『当代文学研究』(北京出版社、二〇〇一)では、第二章第一節「文学時期劃分和相対評価」で、「十七年文学」、「文革文学」、「新時期文学」という最も一般的な当代文学の時期区分を紹介している。また日本においては丸山昇「『建国後十七年』の文化思想政策と知識人—序説的覚書」(丸山昇等編『転形期における中国の知識人』汲古書院、一九九九)、宇野木洋「問題群としての『建国後十七年』文学状況・私的覚書」(『野草』第67号、二〇〇一)などが「十七年文学」を扱っている。

(3) 先行研究としては、譚洛非、譚興国「新的時代、新的探索・新中国成立後巴金美学思想的発展」(譚洛非、譚興国『巴金美学思想論稿』四川大学出版社、一九九一)、徐開塁「『随想録』的先声・評巴金一九五六年写的雑感和一九六二年在上海文代会上的発言」(巴金与二十世紀学術研討会編『世紀的良心』上海文藝出版社、一九九六年)、李存光「簡論巴金建国後的文学創作」(一九九七、註五参詳)、辜也平「十七年的創作・新時代的頌歌」(辜也平『巴金創作綜論』福建教育出版社、一九九七)などがある。また伝記中の記述としては、徐開塁『巴金伝(続巻)』(上海文藝出版社、一九九四)の第一章「曙光来臨」から第四章「凄愴人間」、李存光『巴金伝』(北京十月出版社、一九九四)の第四部「従天堂到煉獄」、陳丹晨『天堂・煉獄・人間—「巴金的夢」続編』(中国青年出版社、二〇〇〇)などがある。これらの研究が増えてくるのは九十年代中盤以降である。

(4) 唐金海・張暁雲主編『巴金年譜(一九五〇〜一九八六)』(四川文藝出版社、一九八九)参照。用語の日本語訳については立間祥介編「巴金年譜」(『集英社ギャラリー[世界の文学]20・中国・アジア・アフリカ』集英社・一九九一)を参照した。

(5) この時期、巴金は精力的にロシア文学の翻訳を行っており、朝鮮滞在中もロシア語の学習を熱心に続けていたことが『赴朝日記』などに記されている。

(6) 李存光「簡論巴金建国後的文学創作」(一九七九)、李存光『我心中的巴金』(文化芸術出版社、二〇〇一)所収。

(7) 『新華月報』第二巻第六号。日本語訳は朱建栄『毛沢東の朝鮮戦争』（岩波書店、一九九一）に拠った。中国の朝鮮戦争参戦に至る経過も同書に詳しい。

(8) 『文藝報』第三巻。

(9) 『大公報』一九五一年一月七日。

(10) 同右。

(11) 『両封慰問信』（『群集文藝』第五巻第四期、一九五一）。

(12) 丁玲「在前進的道路上―関於読文学書的問題」、「跨到新的時代来―談知識分子的旧興趣與工農兵文藝」。いずれも『跨到新的時代来』人民文学社所収。

(13) 他のメンバーは、葛洛（副団長兼党支部書記）古元、白朗、王希堅、羅工柳、辛莽、菡子、逯斐、寒風、西虹、高虹、西野、王莘、伊朗、黄谷柳などであった。（徐開塁『巴金伝（続巻）』）

(14) 『上海文学』一九六一年八月号初出。後に短編小説集『李大海』、『英雄的故事』などに収められる。

(15) 『巴金全集』二十五巻（人民文学出版社、一九九三）所収。

(16) 人民文学社、一九五三年二月初版。

(17) 平明出版社、一九五三年九月初版。

(18) 『人民文学』一九五三年七・八月号合刊。

(19) 『家書・巴金蕭珊書信集』一五〇頁。

(20) 中国青年出版社より「解放軍文藝叢書」のシリーズとして一九五四年十一月初版。

(21) 『入朝散記』（『文藝月報』十、十一月号合刊、一九五三年十一月一日）。『巴金全集』第十四巻（人民文学出版社、一九九〇）所収。

(22) 一九五三年十二月二十六日、『新観察』第二十四期に『志願軍戦士呂玉久和張明禄的故事』として初出。

(23) 一九五三年十二月十五日、『文藝月報』十二月号に『魏連長和他的英雄連隊』として初出。

(24) 満州事変後の廟巷鎮戦で、敵の陣地の鉄条網を爆破する任務に当たった久留米第十二師団所属の破壊小隊による報告が原拠となって脚色されたもの。当時の日本の一世を風靡し、映画、演劇など各方面で大ブームを巻き起こした。軍の教

育総監部編集『満州事変軍事美談集』所収。中内敏夫『軍国美談と教科書』（岩波新書、一九八八）など参照。

(25) 「談『窪地上的《戦役》』的反動性」として『人民文学』八月号に初出。『大歓楽的日子』（作家出版社、一九五七年初版）所収。しかし『巴金全集』十四巻（人民文学出版社、一九九〇）に収められたものは一部削除が行われている。

(26) 作家出版社、一九六一。

(27) 注（2）参照。

(28) 「至樹基（代跋）二」（一九九一年七月五日）。『巴金全集』第二十巻所収、後に『巴金書簡―致王仰晨』（文匯出版社、一九九七）。

(29) 台湾の反共文学に関しては拙稿「五十年代台湾における文学状況・反共文学を中心に」（『藝文研究』七十八号、二〇〇〇）で簡単な整理を行っている。